

小西甚一著「古文の読解」ちくま学芸文庫、筑摩書房 2010年2月10日刊を読む

何事も古き世のみぞ - 古典主義とロマン主義 -

1. 兼好という法師は、どうも考えが消極的で、ピンと来ない——と、諸君はお感じにならないだろうか。もしそう感じないなら、その人はどうかしている。若い元気な人が『徒然草』にはすっかり共鳴しました——などと言うようであったら、まったく心配である。だが...である、諸君が四十歳ぐらいになってから、『徒然草』をじっくり読みかえしてたら、
「何事も古き世のみぞ慕はしき。今やうはむげにいやしくこそなりゆくめれ。」(第二二段)
といったような文章に対しても、それほど抵抗を感じないのではなからうか。
2. だんだん後の世ほど悪くなってゆくなら、兼好の時代からおよそ五百年あまり後の現代は、さぞ悪くなっているだろうと思うと、それほどでもない。兼好は、成田空港を出てからサンフランシスコまで一睡りの間で行ってしまう便利さなど、夢にも知らなかった。しかし、だから『徒然草』なんか古くさい世迷いごとさ——と片づけるのには賛成できない。なぜならば、「いやしくこそ」とあるのに注意ねがいたい。「いやし」とか「めでたし」とかいうのは、主として美的な感覚からのことばである。美的感覚の世界は、かならずしも後の時代ほどすぐれたものになるとはかぎらない。いま俳句雑誌は全国で八百種以上あるらしいのだが、芭蕉よりもすぐれた作家が現在いるとは思われない。また『アララギ』の総帥であった斎藤茂吉でさえ、どう頑ばっても人麿にはかなわないと表明している。
3. このように、最上の傑作が過去において完成され、後の人たちはなるべくそれに近づくことによって自分の作品をよくしてゆくのだ——という考えかたを古典主義とよぶ。古典主義は、西洋では、たいていギリシア芸術をお手本にしている。諸君が写真や複製品でよくお目にかかるであろうギリシア彫刻なんか、まったくみごとなもので、あれ以上どうしようもないほどの完成美をもっており、後の人たちが「まねるよりほかない」と考えたのも無理ではない。
4. しかし、これに対して、「昔は昔、今は今だ。たとえ昔にどんなすぐれた作品があろうとも、われわれは自分で独自の道を切りひらいてゆくべきだ。それが従来の批評基準からいって高い価値をもたないとされようとも、無限に前進を続けてゆくその無限性にこそ真の美を求めべきだ。」という考えかたもあって、ロマン主義とよばれる。
5. この古典主義とロマン主義とは、両様の考えかたが存在するというだけのことで、どちらが正しいと決めることはできない。人間には、男と女がある。男がえらいとか女が下等だとか決めることは、理論的にはできるものでない。が、歴史的な事実としては、男がだんぜんいばっていた時代も

あれば、いまのアメリカみたいに、女性に頭のがらない所もある。それと同様に、古典主義のさかんな時代もあれば、ロマン主義の優勢な時代もあるわけ。十九世紀このかた、ロマン主義が栄えたおかげで、いまの諸君は、どちらかといえば、古典主義があまり好きでないらしい。しかしそれは、諸君が十九世紀の延長線上に生きているからであって、そうでなければ、また別な考えかたになるかもしれない。

6 . 兼好の時代は、古典主義の優勢なころであった。十四世紀ごろの人たちが、すべて古典主義者であったわけではない。しかし、兼好の属していた文化人グループでは、圧倒的に古典主義が優勢であった。当時の古典主義者たちにとっての「古典」は、平安時代に在った。平安時代の貴族たちが送っていたような美しい生活、それこそ兼好の理想であった。ところが、兼好の時代、現実にはそのような美しい生活は存在していなかった。だから「古き世のみぞ慕はしき」なのである。

7 . そういった頭で、もういちど『徒然草』ぜんたいを読みかえしていただければ、兼好がどんなに平安時代的なものを理想としていたかよくわかるだろう。「なんだ、古くさいものが慕わしいなんて。眠気ざましにパンチでもひとつ進呈しようか。」などと文覚流の荒わざを出す前に(64 ページ参照)、古典主義といっても、古くさいだけとは限らないことにちょっと御注意ねがいたい。二十世紀の新しい詩をうち建てたT・S・エリオットが「現在は過去を自身のなかに生かすとき、はじめて真の現在でありうるし、過去は現在意識でとらえられるとき、はじめて過去そのものでありうる。それが伝統(tradition)の意味だ。」というすばらしい意見を述べ、その考えがいまのヨーロッパ・アメリカを通じて支配的だということも、ついでに御紹介しておこう。

P93 ~ 96

[コメント]

古典主義とロマン主義。このような説明が随所に見られるから、小西甚一先生のこの著作や「古文研究法」は、高校生用の参考書とはいえ名著と呼ばれるのだと思う。高校生も社会人も大いに学ぶべし。

- 2010年3月22日 林明夫記 -